

プロジェクト・ベース学習を導入した「総合演習」の成果・課題と展望

市川 洋子

1 はじめに

1998年（平成10年）に「教育職員免許法の一部を改正する法律」が施行され、教職の必修科目として「総合演習」が導入された。総合演習は、「人類に共通する課題又はわが国社会全体にかかわる課題のうち一以上のものに関する分析及び検討並びにその課題について幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含む」^[1] ことを内容としている。

その目的は、「人間尊重・人権尊重の精神はもとより、地球環境、異文化理解など人類に共通するテーマや少子・高齢化と福祉、家庭の在り方などが国の社会全体に関わるテーマについて、教員を志願する者の理解を深めその視野を広げるとともに、これら諸課題に係る内容に関し適切に指導することができるようになるため」^[2] である。

しかし、2007年（平成20年）に教育職員免許法施行規則の改正によって、「総合演習」が教職科目から外され、平成22年度入学の学生から「教職実践演習」が新たに導入された。「学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』として位置付けられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。」とある^[3]。教員として最低限必要な

資質能力を身に付けているかどうかを課程認定大学が「確認」することが強調されているが、「生きる力」を育成する教員にも「生きる力」を求めているという点で、本質的な目的は「総合演習」とほぼ同義であると言えよう。

筆者は、平成20年度より「総合演習」を担当してきた。そこで、本研究では、これまでの実践を総括する意味で、平成23年度後期に実施した「総合演習」の成果と課題を検討し、これから始まる「教職実践演習」の実践に資することを目的とする。

2 「総合演習」科目の授業の概要

(1) 実施期間及び履修学生

実施期間：平成23年度後期

履修学生：盛岡大学文学部児童教育学科
3年生45名

(2) 授業の概要

刻々と変化を続け、またその速度が増している現代社会を生きていく児童生徒は、広い視野に立ち、積極的かつ主体的に、協同的に物事に関わる資質をもつことが必要である。このような資質を育むためには、教師自身にも同様の資質能力が求められる。そこで、この授業では、従来型の知識伝達型ではない、子ども中心の教育方法の1つであるプロジェクト・ベース学習 (Project-Based Learning) を経験的に学び、学習者と指導者を往還しながら子ども中心の教育の意義を考えるとともに、指導法のスキルを獲得することを目的とし、以下のようなスケジュールで授業を実施した。

①	<p>イントロダクション及び講義：キーコンピテンシーと「生きる力」</p> <p>実際にPISA調査問題を解き、これからの時代に求められる学力の特徴について捉えた。</p>
②	<p>講義：2つの学力観－構成主義と客観主義</p> <p>客観主義と構成主義というパラダイムの違いによって学力観が異なること、及びキーコンピテンシーや「生きる力」が構成主義的パラダイムにおいて語られていることを説明した。</p>
③	<p>講義：プロジェクト・ベース学習とは</p> <p>PBLの歴史の変遷、特徴、評価のあり方、教育的意義等について説明し、本授業でPBLを体験する意義について考えた。</p>
④	<p>講義：プロジェクト・ベース学習の進め方</p> <p>PBLの進め方及び評価方法について説明。また、今興味関心を持っているトピックを1つ考えてくるよう指示した。</p>
⑤	トピックの選択とグルーピング
⑥	企画書の作成（プロジェクトテーマの設定）
⑦	企画書の作成（学習計画を立てる）
⑧	課題解決
⑨	課題解決
⑩	課題解決
⑪	課題解決
⑫	プレゼンテーション
⑬	プレゼンテーション
⑭	プレゼンテーション
⑮	プロジェクトの振り返り・まとめ

本授業の特徴は以下の通りである。

- Project-Based Learning（PBL）を体験する。

- PBLでは、学習者の興味関心を尊重する。したがって、本授業においても学生の興味関心を元にプロジェクトのテーマを構築していくが、「教育につなげる」という大枠を設定した。これは、「総合演習は、人類に共通する課題または我が国社会全体にかかわる課題のうち一以上のものに関する分析及び検討並びにその課題について幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする」（教育職員免許法施行規則第6条別表、1998年）とされていることを受けて設定したものである。
- 教員がすべてを教えるのではなく、学生が自ら興味あるテーマを決めて学ぶ。教員は、学生の学びをより深く意味のあるものにするためのアドバイザーである。
- グループの構成は、2～5名とする。
- 毎授業後、学習履歴図^[4]において、振り返りを行う。
- 課題解決（4時間）は、グループのメンバーが集まって互いの進捗状況を確認し合ったり、進行上の問題を話し合ったり、アドバイザーに相談したりする時間である。この時間に、資料収集のための外出も可とする（許可制）。ただし、終了時刻には教室に戻り、学習履歴図に記入・提出する。
- 学外の施設を訪問する場合、事前にアポイントを取る必要がある。その場合、授業担当教員の依頼状等が必要となる場合があるので、事前に相談すること。
- 課題解決の成果を発表する。

(3) トピックの選択とグルーピング

PBLでは、学習者の興味関心に基づいたテーマに取り組ませる。そこで、現在興味関心のあるトピック（テーマにつながる話題）を考えてきてもらい、全員の発表をすべて黒板に書き出した。

自分が考えてきたトピックを一度リセットし、書き出されたトピックの中から面白そうだと思うトピックに手を上げさせた。同じトピックを選んだ者同士で、グループを組んだ。ただし、グループの人数を上限5人とし、6

人以上になった場合は、トーキングサークル⁵⁾という手法を使ってさらにグループを細分化していった。その結果、11グループが編成された。

(4) 自己評価規準の設定と自己評価

PBLにおいて、自己評価は学習活動である。自分で目標を設定し、目標達成に向けて自己評価（モニタリングとコントロール）を繰り返すプロセスをたどる。そこで、自己評価規準として2006年に経済産業省が提唱した「社会人基礎力」を提示した。自分のプロジェクトを進めていくことでどのような資質能力が身に付くか、社会人基礎力12項目の中から3つを選択させ、自己評価規準とした。さらに、自己評価のツールとして学習履歴図を使い、毎回の活動を振り返らせた。振り返り（reflection）とは、単にその日の活動を記録して感想を書くことではない。「内省－熟考－反映」という思考プロセスである。その日の活動を内省し、プロジェクトのゴール及び評価規準をもとに自己評価（熟考）し、次の活動に反映させるという一連の思考プロセスを、学習履歴図の作成を通して行わせていった。

(5) 企画書の作成

PBLでは、以下の手順で企画書を作成し、プロジェクトを構成していく。

- ① ウェビングを行って、トピックから連想することを思いっくままにできるだけたくさん書き出し、そこからやりたいテーマを絞り込んでいく。本授業では「教育につながる」という大枠を設定しているので、「教育とつながられる」「時間内に終わる」「グループのメンバー全員が飽きずに取り組める」という条件を満たすものに絞り込んでいった。
- ② テーマを追究するにあたって、調べなければならないことや課題をリストアップする。
- ③ 最終ゴールを設定する。PBLでは、学んだことを最終的に成果物として表す。例えば、新聞、ポスター、パンフレット、エッセイ、劇、制作物など、多種多様である。

本授業では、「最終成果物は何か」「成果物の対象は誰か」「コンセプトは何か」を考えさせ、より具体的にイメージさせた。

- ④ 「このプロジェクトは、あなたの生活にどのように役立ちますか?」「また、あなたのまわりの地域や社会に対してどのような役に立ちますか?」という問いに答えることで、これから取り組むプロジェクトの価値を考えさせた。人は、意味のあることや価値があること、必要のあるものに動機づけられる。加えて、意味探究社会といわれる現代において、このプロセスは学習の動機づけとして重要である。
- ⑤ 活動計画を立てる。
- ⑥ このプロジェクトに必要な情報源（3種類以上）をあげる。多くの情報をインターネットで入手できるため、無批判的に情報を収集し、単なる調べ学習に終始してしまわないよう、情報源の1つに必ず実在の人物を入れた。生きた情報の収集を通して、学習活動が多様化し、学習が地域に広がることを意図したものである。
- ⑦ 自己評価の規準を設定する。本授業では、このプロジェクトを行うことによってどのような力が身につくか、社会人基礎力の中から3つ選ばせた。

3 授業の成果と課題の検討

(1) プロジェクトの実際

平成23年度後期に実施した「総合演習」では、11グループによるプロジェクトが展開された。各グループのプロジェクトテーマは以下の通りである。

ディズニーがもたらすもの～低学年道徳教材の開発

スポーツの魅力を伝える大学生対象のパンフレット作成

野菜から見える食育の大切さを小学校における食育につなげる～親子で作れる料理レシピ集の作成
--

健康的なダイエットに取り組む意欲を高められる大学生向けのダイエットブックの作成
教師を目指す学生を対象とした血液型に関するパンフレット作成
相手に好印象を抱かせるのに役立つ大学生向けの冊子作成
お金の歴史についてまとめた小学生向けのパンフレット作成
教科書に載せたい曲づくり～小学校中学年対象、手軽で歌いやすい合唱曲づくり
平和に関する「戦争」「貧富」「震災」を背景とした小学校教育の進歩についての冊子作成
薬物使用の害を紹介する教材づくり(中学生対象)
ユニバーサルデザインに特化した聴覚支援施設のパンフレット作成～高学年を対象にした総合的な学習の時間の福祉教材として～

その1つであるグループ「めーぶる」のプロジェクトを取り上げ、どのように取り組んでいたかを紹介する。

グループメンバーの5名は、ユニバーサルデザインに特化した聴覚支援施設<CAFÉ MAPLE>を設計し、小学校高学年を対象とする総合的な学習の時間の福祉教材としてパンフレットを作成した（図1：プロジェクト企画書）。きっかけは、メンバーの一人が手話クラブに所属し、聴覚障害者との交流活動を通じて聴覚支援施設の存在を知ったことによる。聴覚障害者だけでなく誰もが利用できるユニバーサルデザインによる施設を企画したいということで始まったプロジェクトである。学習履歴図（図3）を見ると、聴覚支援施設の調査、研究者へのインタビュー、手話講座の実施、カフェの構想と設計、フロアガイドの作成といった活動を行ってきたことが読み取れる。

図2は、プロジェクトを通して社会人基礎力がどう変容したかを自己評価したものと、選択した3つの基礎力についての振り返りである。「情報のコピーアンドペーストは意味の薄いものである」という記述から、課題解決に有用な情報収集の在り方に気付いている。教員を志すものが、安易な情報収集でレポート作成を行うことに疑義を抱いたことは、大変重要なことである。批判的な情報収集力・選択力といった資質がなければ、指導する子どもに非批判的思考力を身に付けさせることはできない。この学生が獲得した気づきは、将来教員になった時大いに生かされるだろう。また、「すべてをイチから創造するのではなく、アイデアを練り参考資料を取捨選択して組み立てることも創造力を養うために有効」「プレゼンテーションはパワーポイントとパンフレットを使用し、情報を受け取る側に配慮して提示」といった記述から、情報の編集やプレゼンスキルについての知見を得たことが分かる。

図3は、学習履歴図である。○は、活動内容である。○の高さは、どの程度ゴールに近づいたか、選択した社会人基礎力をどの程度駆使したかといった観点で自己評価した結果を示すものである。また、なぜその位置にしたのか理由を○の下に書く。学習履歴図作成で重要なのは、この理由の部分である。理由を考えることで自分の活動を客観的に俯瞰し、reflection（内省－熟考－反映）が行われる。下線は、reflectionが表れている部分である（筆者による）。記述の内容と○の位置が一致しない場合は「？」付きのコメントを入れ、必ず返事を書かせる。「総合演習」の時間、講義室に残っている学生はほとんどいないが、この学習履歴図を読むことによって学生の取り組み状況や考えが把握でき、しかも紙面上での対話を行うこともできた。

総合演習 《プロジェクト企画書》

学生番号	名前	完成日 2月 20日
グループ名 めーぷる		
プロジェクトのタイトル 聴覚支援施設〈Cafe Maple〉企画書		
1. トピックから連想することを思いつくままにできるだけたくさん書き出してみましょう。そこから、やりたいテーマを絞り込みましょう。		
2. このテーマを追求するにあたって、調べる必要があること、調べたいことを3つ以上あげなさい ・聴覚支援施設の調査 (有無/場所/概要/工夫 etc) ネット検索 ・手話教室/サークル インタビュー ・メディア調査 (手話を使った歌/ドラマ/映画/ニュース etc) 震笑グッズ		
3. このプロジェクトを()時間進めて、どういう状態になれば完成といえますか (具体的な成果物、対象)。 高学年を対象にした総合的な学習の時間の福祉教材として、ユニバーサルデザインに特化した聴覚支援施設〈Cafe Maple〉のパンフレットを作成		
4. このプロジェクトは、あなたの生活にどのように役立れますか? 聴覚支援についての理解を深め、今後の支援活動につなげ、周囲に発信することで輪を広げる。 また、あなたのまわりの地域や社会に対してどのような役に立ちますか? 障がい者の有無に関わらず誰もが利用しやすい環境づくりのきっかけになる		
5. 2をもとに活動計画を立てなさい。(⑤番までありますが、すべてうめる必要はありません)		
①	コンセプトの思案	活動時間 (1.5時間)
②	聴覚支援施設の調査	活動時間 (1.5時間)
③	手話教室・サークル インタビュー	活動時間 (時間)
④	メディア分析	活動時間 (1.5時間)
⑤	プレゼンテーション準備・まとめ	活動時間 (4.5時間)
6. このプロジェクトに必要な情報源 (3種類以上) の中で、実在の人物を誰にしますか? 目的は何ですか? (インタビューの対象者) 東北大学 塩野目先生		
7. このプロジェクトを行うことによって、あなたにとってどのような力が身につきますか? 社会人基礎力の中から3つ選びなさい。 実行力 創造力 発信力		

図1 プロジェクト企画書

総合演習 《社会人基礎力》

今の私

記入日（1回目：9月27日）（2回目：1月24日）

Action	4 : Excellent	3 : Good	2 : Fair	1 : Poor
<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 物事に進んで取り組む力（主体性）				
<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 他人に働きかけ巻き込む力（働きかけ力）				
<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 目的を設定し確実に実行する力（実行力）				
Thinking				
<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 現状を分析し目的や課題を明らかにする力（課題発見力）				
<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けたプロセスを明確にし準備する力（計画力）				
<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 新しい価値をわかりやすく伝える力（創造力）				
Communication				
<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 自分の意見をわかりやすく伝える力（発信力）				
<input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 相手の意見を丁寧に聴く力（傾聴力）				
<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 意見の違いや立場の違いを理解する力（柔軟性）				
<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 自分の周囲の人々や物事との関係性を理解する力（状況把握力）				
<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 社会のルールや人との約束を守る力（規律性）				
<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ストレスの発生源に対応する力（ストレスコントロール力）				

プロジェクトを通してどれだけ成長したか、ふり返りましょう。

（記入日 | 月 24日）

選択した規準	ふり返り
実行力	これまでの「調べ学習」の取り組みは早く簡単に情報を得る手段が良いと考えていたが、情報のコピー・ペーストは悪癖のうすいものであると気付いた。有識者にリアルな意見をきくためにポイントメントをとり、有益な情報が得られたため、実行力を発揮できた。
創造力	成果物としてのパンフレット作りにおいて、よりよい認定を把握するために創造力を働かせることができた。また、全てを1人から創造するのではなく、アイデアを複数参考資料を掘り探して組み立てることも、創造力を養うために有効であったと考える。
発信力	プレゼンテーションはパワーポイントとパンフレットを使用し、情報を受け取る側目には面白く見せられたと思う。手話リングを入れることで手話を身近に感じてもらえたが、しかしより見る人のイメージが話し方やアクションができればよかったと悔しく思う。

図2 「社会人基礎力」の自己評価

11 / 1	11 / 8	11 / 15	11 / 22	11 / 29	12 / 6	12 / 13	12 / 20
<p>5人の意見が集まって 「エビソウ」は広かいて 良かった。次回三期生</p> <p>「エビソウ」</p> <p>「エビソウ」</p>	<p>「エビソウ」の企画が 具体化した。計4回 の企画案をまとめる が、課題である。</p> <p>「エビソウ」</p>	<p>「エビソウ」の企画案 1回、2回、3回、4回 の企画案をまとめる が、課題である。</p> <p>「エビソウ」</p>	<p>「エビソウ」の企画案 1回、2回、3回、4回 の企画案をまとめる が、課題である。</p> <p>「エビソウ」</p>	<p>「エビソウ」の企画案 1回、2回、3回、4回 の企画案をまとめる が、課題である。</p> <p>「エビソウ」</p>	<p>「エビソウ」の企画案 1回、2回、3回、4回 の企画案をまとめる が、課題である。</p> <p>「エビソウ」</p>	<p>「エビソウ」の企画案 1回、2回、3回、4回 の企画案をまとめる が、課題である。</p> <p>「エビソウ」</p>	<p>「エビソウ」の企画案 1回、2回、3回、4回 の企画案をまとめる が、課題である。</p> <p>「エビソウ」</p>

図 3 型習履歴表

(2) 授業効果調査の分析

総合演習の最終日に実施した授業効果調査の結果を表1に示す。調査は各質問に6段階で回答するもので、6に近いほど肯定的である。表中の数値は受講者45名の平均値を示す。また、表2は、授業に関する感想（自由記述）の抜粋である。

この授業は、どの項目においても肯定的回答を得ることができた。プロジェクトが進行している間は、教員として学生にかかわることはあまり多くない。学習履歴図に目を通すこと、出席を取ること、いくつかアドバイスをすることくらいである。それにもかかわらず、「教員の熱意が感じられた」の平均値が5.82と高かった。

必要に応じて履歴書にコメントを入れたことと教員の立場が講義者からアドバイザーに変わったことが要因として考えられる。コメントといっても、前述したように下線を入れてただけであるが、何らかのリアクションは大学生であっても教員との関係性に良い影響を及ぼすようである。

自由記述の回答数は多くない（45名中6名）が、いずれも肯定的である。「人生で初めて主体的な学びができた」「子どもたちに伝えたい」「今後も活かしていきたい」「将来につながる」といった記述から、PBLの経験が「総合的な学習」や課題解決型学習に生かせることを理解している。

表1 授業効果調査

この授業に積極的に取り組みましたか。	5.50
積極的に疑問な点を質問したり、自分で調べたりしましたか。	5.35
授業のねらいや評価の方法が明確に示されていましたか。	5.68
学生からの質問や提出物に適切に対応していた。	5.80
内容の理解を助けるための授業の工夫がなされていた。	5.70

授業に対する教員の熱意が感じられた。	5.82
授業を通して自分にとって新しい知識(技能)や物事の見方が得られた。	5.75
授業内容は自分にとって適切なレベルだった。	5.70
全体としてこの授業に満足している。	5.73

表2 授業効果調査（自由記述）

- ・プロジェクトを通して学んだことを総合的な学習に生かそうと思える良い講義でした。
- ・人生で初めて主体的な学びができたと思います。この経験を子ども達に伝えたいです。
- ・新しい知識や新しい学習方法などを楽しく学ぶことができ、受講することができてよかったです。
- ・実際に体験してPBLの効果を実感でき、今後活かしていきたいと思う。
- ・将来につながる内容だった。
- ・大学でこういった形態で学ぶができるとは思っていなかった。大変自分のためになった。

(3) 学生の振り返り

PBLを経験させたからといって、体験学習や総合的な学習を実践していく上で必要なスキルが身に付くとは限らない。指導者という視点から学習の振り返りを行わせ、指導に資する気づきを自覚させていくことが必要である。そこで、前述したように、社会人基礎力から評価規準を選択させ、それに基づいて学習履歴図をツールにして振り返りを行わせた。さらに、プロジェクト終了後、選択した社会人基礎力がどの程度身に付いたのか、学習履歴図を見直しながら自分の成長を振り返らせた。

表3は、選択した基礎力がどの程度身に付いたかを振り返った記述の一部抜粋である。

表3 社会人基礎力に関する振り返り

【主体性】14名 (文中下線は筆者による)

【01】グループの人数が4人と少なかったため、皆で協力せざるを得なかったので、物事に取り組むことができた。

【02】大学に入学してからあまり主体性のない生活をしていたように思う。しかし、総合演習は自分たちで行動しなければ、いいプレゼンにつながらない。今回はみんなの前でよりよりプレゼンをするために、自主的に成果物完成のために取り組むことができた。

【03】他者から与えられたテーマではなく、自分が興味をもったテーマについて調べたので、それを通して何を得たいかなど、具体的な目標をもって、主体的に取り組むことができた。

【04】今までは、個人でやる時目標を低めに設定したり、グループでも中心的な取り組みに積極的に行っていないことが多かったけれど、全員で全力でプロジェクトに取り組み、私自身も「やるよ」と言えたのが自分でもびっくりした。取り組んだ分だけ、様々な力が付くし、ゴールがうれしいと思えると感じた。

【働きかけ力】7名

【05】今まで結局周りに流され、指示されたことをやるが多かったが、今回は社会人基礎力を意識したことにより、自分の意思を出してみたり、してほしいことをやってもらうことができた。

【06】今まで「こういうことをやりたい」で終わらせてばかりだったが、それを人に受け入れてもらうためには、自分も他人も納得いくもの(言葉でも)が必要であるということ考えた。

【07】他人に働きかけるためには、このプロジェクトに対する自分の思いを強くもつことが大切であると感じた。

【実行力】23名

【08】今回は、活動の計画をきちんと立ててから進めたので、目的をもって活動できた。活動が思ったように進まなかったときは、自分たちの行動を見つめ直し、明確な目標をもってゴールに向かって活動することができた。

【09】実行力は、やろうとする意志だけではならず、目的を明確にとらえてこそ、確実に実行力がつくのだと感じた。以前よりも成長できた。

【10】実行前に計画を立てることで、どう実行するか、実行することでどうなるかを考えることができた。実行後の反省を次に生かすことができるよう工夫した。

【11】学習履歴図を初めて使ってみて、目的に向かって少しずつ学習力が伸びていくのが目に見えて、確実に進めているな、と感じた。日頃から活用することによって、行動する力が増えていくように感じた。

【12】プロジェクトの最初は、目的がきちんと定まらず、実行力も弱かったが、目的が決まってからはそれに向かって実行することができた。目的を定めることが実行力に大きくつながった。

【課題発見力】6名

【13】自分たちで課題を見つけ、調査をする活動をあまりしたことがなかったが、プロジェクトを進めていく中で課題の見つけ方を知ることができた。以前のように、与えられたものをただ調べるだけの頃よりは成長できた。

【14】学習履歴図で毎日どんなことをして、ゴールまであとどのくらいなのか、そして何が良かったのか、何が足りていないのかを書くことで、どんな状況なのかを知り、次回よりよく取り組むための目標が意識しなくてもできていた。

【計画力】14名

【15】目的をしっかりと決め、ぶれないゴールをつくり、その振り返りを何度も繰り返す過程を進めていくことが大切である。その過程があったおかげで、発表の際の質問にもスムーズに対応できた。

【16】課題解決のために、何をすればよいのか、どのように調べたらよいのか、チームで話し合って明確にして進めることができた。また、プロセスを明確にすることによって、実行への道もとても近くなった。しかし、道のりの計画は立てられたが、時間の計画が甘かった。プロセスと時間を照らし合わせられる計画力をつけたい。

【17】最終的に何ができればよいのかをまず考え、スケジュールと照らし合わせながら逆算して計画を立て、実行することができた。

【創造力】21名

【18】大人にも子どもにも親しまれるディズニー作品をただ面白い、楽しいで終わらせるのではなく、新たに教育的視点から見ることができた。パワーポイントでの説明や道徳教材を実際につくることで、わかりやすく伝えることができた。

【19】プロジェクトを通して得られた新しい価値を、見る人にどう伝えればわかりやすいかを考えながら取り組むことで、創造力をつけられたのではないかと思う。

【20】パンフレット作りにおいて、よりよい設定を構想するために、想像力を働かせることができた。また、すべてを1から創造するのではなく、アイディアを練り、参考資料を取捨選択して組み立てることも、創造力を養うために有効であった。

【21】ユニバーサルデザインに配慮した施設や商品は今では多く見られ、また、新しいものが次々創造されている。私たちが今回聴覚支援施設を想定したカフェでは、老若男女どの国の、どんな人でも利用しやすい場づくり

を考え、パンフレットという形で示せたので、教育教材として今後役立てられ、新しい価値として伝えられたと考える。

【発信力】29名

【22】今までは、ジェスチャーや雰囲気で相手に分かってもらっていたが、そうではなく、何に疑問をもち、自分の考えが生まれたのかの過程まで話すようにした。それにより、深い話し合いができた。

【23】今までの発表は、資料に書いてある文章をそのまま読むだけの発表だった。今回は、書いてあることだけでなく、聞いている人に伝えようという気持ちで発表した。次からは、もっと自分の言葉で相手をひきつけるような発表ができたらしいな。

【24】わかりやすく伝えるために必要なことは、積み重ねてきた学びの深さである。この実感はこの先にも活き続けるものであると感じている。また、発信のために自らも学びを深める大切さも実感した。

【25】グループ活動だったので、自分だけが理解するのではなく、みんなで理解しながら進めていこうとした。自分の考えや意見を伝える機会が多く、より分かりやすく説明しようと意識化できた。

【26】伝えるということは、自己満足で終わらないということ、共有するためには双方の意思の中和が必要であるということを学び、押しつけるだけの意見ではなく、取り入れることで生まれるものだと学んだ。

【27】自分の意見を伝えることが苦手だったけど、グループのメンバーがしっかり聞こうという姿勢を見せてくれたので、意見を伝えることがあまり苦に感じなかった。しかし、わかりやすく伝える力は欠けていると感じたので、伝える相手がだれであろうと、自分の意見を伝える経験を積んでいこうと思った。

【28】普段の生活ではうまく伝えられなかったら言葉にしないという方法もとれるが、プロジェクトでは話し合うことで先に進むので、

たくさんの意見・考えをとにかく伝えることから始まった。取り組む中で、言葉や動作を加え、相手に理解してもらえるよう工夫できた。

【柔軟性】 4名

【29】自分たちのグループの発表で、みんながうなずきながら聞いてくれたり、おいしそうと私たちと同じ気持ちになってくれた。自分の立場、意見を共有してくれたり、理解されることはとてもありがたいことだと感じた。相手の立場をわかろうとする気持ちが高まった。自分を理解してもらうには、まずは相手のことを理解してあげようということに気付いた。

【状況把握力】 6名

【30】人任せに進めてきたことが多かったけれど、今回は今までにないような自分の取り組む気持ちがあった。そのためか、誰が何をやっているのか、自分がどこに取り組んだらいいのかをよく考えていたと思う。自分が動くことで発見できることってたくさんあるなと知ることができた。また、一人でやるのは大変だからと今まで思っていたけど、グループで誰かだけががんばるのではなく全員で頑張っているからやりきれると思った。

学生が評価規準として多く選んだのは、発信力 (29)、実行力 (23)、創造力 (21) であった。なお、ストレスコントロールは0であった。選択の規準はプロジェクトの内容や学生個々の状況に依るが、概ね本学学生に不足しているものであり、妥当な選択だと言えよう。

【主体性】を選択したのは14名であった。主体的な取り組みに行わせるには、自分達で取り組まざるを得ないような場を設定することが有効であること (【01】【02])、自分が興味を持ったテーマや具体的な目標を持つこ

と (【03]) が必要であると述べている。また、主体的に取り組むことで得られる満足感・達成感が大きいことにも気付いている【04】。

【働きかけ力】を選択したのは7名であった。自分が興味を持ったテーマだからこそ、自分も相手も納得できるように伝えたいという思いが強くなり、それが働きかけにつながることを理解している (【06】【07])。【主体性】とも関連するが、学習や行動の動機付けとして学習者自身の興味関心が重要であることが再確認できる。また、自己評価の規準を自己選択したことで強く意識化され、積極的に働きかけようとした様子もうかがえる (【05])。

【実行力】を選択したのは23名であった。実行力を発揮するには目的を持つことが大切であるとの記述が多く、目的的活動の中で実行力が育てられることを理解している (【8】【9】【11】【12])。また、学習履歴図を作成することにより、行動を見つめ直す、反省を次に生かす、成長を実感することができたという記述から (【8】【10】【11])、学習履歴図が単なる自己評価シートではなく、実行力を高める機能を持っていたことが分かる。

【課題発見力】を選択したのは6名と少なかった。プロジェクトのテーマは自分たちで設定しなければならない。プロジェクトを構築していくことそのものが課題発見のプロセスであったことが【13】の記述からうかがえる。また、学習履歴図が新たな課題発見につながっている学生もいた (【14])。

【計画力】を選択したのは14名であった。PBLでは、最終ゴールをイメージし、そこから逆算して解決のための問いや計画を考えていく逆算的アプローチをとる。「最終的に何ができればよいかをまず考え、スケジュールと照らし合わせながら逆算して計画を立て、実行することができた」 (【17]) という記述からも、そのことがしっかりと実行されていたことが分かる。また、計画を立てるだけではなく、計画そのものを何度も振り返り、見直すことの大切さも感じていたようだ (【15】【16])。

【創造力】を選択したのは21名であった。

興味を持ったトピックと教育をつなげるという大枠のテーマが、トピックを見る視点を変え、新たな価値に気付かせている（【18】【19】【21】）。また、収集した情報の編集において創造力が培われることに気が付いている記述（【20】）も見られた。

【発信力】を選択したのは29名だった。「今までは、ジェスチャーや雰囲気や相手に分かってもらっていた」（【22】）と思う人は学生に限らず意外と多いのではないだろうか。教員を目指すのであれば、高いコミュニケーション力が求められる。PBLは、協同学習をより重視しているので、自分たちで話し合い、合意形成を図って進めていかなければならない。このような場に学生を追い込むことで、【発信力】を意識した活動が行えたのだろう（【23】【25】【26】【28】）。また、コミュニケーションの基本である傾聴の重要性にも気付いている（【27】【29】）。

【状況把握力】に書かれた記述【30】は、【主体性】にもかかわった内容である。このプロジェクトは自分たちで進めていく活動であるという当事者感覚（オーナーシップ）が、「誰が何をやっているのか、自分がどこを取り組んだらいいのかをよく考え」ることにつながっていった。

（4）成果と課題

学生の振り返りから、PBL経験を通して、多様な成長を自覚させることができたといえる。教員になるために、教科等や生徒指導の専門知識を習得することは重要であるが、それだけでは不十分である。教育現場に出れば、「子どもたちに深く学ばせるためにはどうしたらよいか」「どうすれば一人一人の子どもを生かした授業になるのか」といった本質的な問いに向き合わざるを得なくなる。その時、PBL活動と振り返りの繰り返しによって得た知見、例えば「興味を持ったことには主体的に取り組む」「目標が明確になれば積極的に働きかけられる」「計画を実行するには振り返りが重要である」が重要となる。

21世紀の時代に学校教員に求められる資質

の中で、特に変化の時代に生きていくために必要な「自分自身で課題を発見し、解決していける課題解決能力」「豊かな人間関係を築けるコミュニケーション能力」「社会の変化に適應するための知識や技能」⁶⁾に関わる記述が多く見られたことから、「総合演習」にPBLを導入したことによって、「総合演習」の目標をほぼ達成できたといえる。これは、「学習履歴図」や「振り返り」を通して、指導者と学習者を往還しながら意識化させたことが大きく寄与していると考えられる。

課題として2つのことが考えられる。1つは、どのグループも、プロジェクトを通して学んだことは多かったが、プロジェクトの内容の深まりという点で差異が出たことである。例えば、「ディズニーがもたらすもの～低学年道徳教材の開発」プロジェクトでは、ウォルト・ディズニーの生き方・考え方から道徳的価値を抽出し、小学校低学年の道徳教材を作成するという内容であった。一方、「教師を目指す学生を対象とした血液型に関するパンフレット作成」プロジェクトは、アンケートの取り方やデータ分析で学ぶことが多かったが、教育的観点から見ると表面的であった。心理学的アプローチからさらに深めていく必要があった。

もう1つは、実際の教育活動の中でどう生かしていくか実践レベルで考えさせていけば、理解がより深まっていったのではないかとということである。PBLを通して学生が獲得した気づきは、どれも教育活動の様々な場面で活用できるものばかりである。最終日に、「総合演習」を総括する時間を設け、「総合演習」で得た知見を目前に迫った教育実習にどう生かすかを考えさせればよかったと反省している。

5 終わりに

平成25年度後期から、いよいよ「教職実践演習」が本格実施される。「教職実践演習」は、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足して

いる知識や技能等を補い、その定着を図る「学びの軌跡の集大成」の位置づけである^[7]。「総合演習」の成果を踏まえると、「教職実践演習」においても、PBLを導入することで以下の効果を期待できる。

- 自分の興味関心に基づいてテーマを設定させることで、動機づけることができる。
- 企画書を作成することで、学習活動の見通しを持ち、目的的活動となり得る。
- 自己評価規準を元に振り返り（reflection）を行わせることが、反省的实践者（reflective practitioner）の育成につながる。

「総合演習」では、テーマによって内容的に深まりに欠けるプロジェクトもあったが、「教職実践演習」では、自己に不足していることを課題として取り上げ、プロジェクトのテーマをより明確なものにすることができる。興味関心と直接関係したものであれば申し分ないが、そうでない場合でも、自分の必要観から発せられる問いは学習者を動機づけるものである。さらに、教育実習や介護体験を経ているので、「総合演習」で深められなかった実践レベルでの理解にまで深めていくことができるだろう。

一人の教員が何人の学生を担当するのか、とりあえず教員免許を取っておくという学生にどう対応していくのか、「教職実践演習」の担当者同士の共通理解をどう図っていくのかといった運営上の課題は残されているが、「総合演習」で得た知見を生かした「教職実践演習」を通じて、専門的な知識・技能と反省的实践者としての資質・能力を備えた教員養成を目指していきたいと考える。

注及び引用文献

1. 教育職員免許法施行規則 第6条 別表備考。
2. 教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方法」, 平成9年7月
3. 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」 平成18年7月
4. 学習履歴図とは、自己評価のためのツールで、市川洋子が開発した。詳しくは市川洋子、「総合的な学習で自己評価力をつける」明治図書, 2004を参照のこと。

5. トーキングサークルとは、ネイティブ・アメリカンが行っていた民主的な話し合いの方法の1つである。トーキングピースを時計回りにまわしながら、トーキングピースを持った人に話す権利があり、それ以外の人はだまって聞く義務がある。詳しくは、Newell J., & Ryzin, M. J. V.R. Assessing What Really Matters in Schools; Creating Hope for the Future. : A Division of Rowman & Little Field Publishers., 2009. p.64.を参照。
6. 前掲書2.
7. 前掲書3.